WASON
AQ
1104
J74+

Sept 29
1888
no. 129

版權所有

各土曜日出版

一冊五錢

當府內無郵稅

明治廿一年　（第百貳拾九號）　九月廿九日發

社說
婦女子修身の覺悟

論說
印度の女傑蘭梅夫人（佐々木豐壽子）
兩半球の批難（蘭梅夫人）

批評
魏志の倭女王は神功皇后に非ず○婦人言論の自由を讀みて○雜評

叢話
男女交際の作法（箕作佳吉）○仲秋無月○佳人、少年に答ふ○一時間にても儉約する事○泰西美術小話（美妙齋）○一唱百歎

小說
哲女の卷○さすがに双紙○小說神髓

佳傳
魯國の孝女エリサベッス、ロプゥロツフ孃

寄書

新報

外報

小供談

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 129. September 29th, 1888.

EDITORIAL:— Woman's Resolutions in Life (No.I) The Working of the human mi ıd.

LEADING ARTICLES:— Mrs Ramabai of India, by Mrs Sasaki.

CRITICAL NOTES:— " The Empress Jingo. " "Woman's Liberty of Speech. " Miscellaneous Works.

MISCELLANIES:— " Hint on Social Intercourse, " by Dr. Mittukuri. " A moon-less Night in Mid-autumn. " " The answer to a Young-man's Letter. " " Small Hours can not be Despised. " "How we should speak. " "Western Fine Arts."

NOVELS:— " Tetsujo no Maki. " " Sasugani. " " Bouquet of novels. "

BIOGRAPHIES.

CORRESPONDENCES.

GENERAL NEWS.

通信女學の廣告

通信女學 第拾二卷 發兌

來二十九日出版すべし

一冊定價廿錢全國郵税共 枚數七十頁

蓋し最良の教科書

婦人會員の會費及ひ 内の通學に讀せり

●珊瑚の珠 （第七十九回）

○民部卿の局曰くかみつがたわがならず無理を宣ふものと知らばうらみなしゑもつがたれ必ずおろかなるものと知れば我にいかりなし。（和論語）

○婚禮に白き小袖を用ると葬禮の學びなりとぞ今世上にいふ人あり甚だあやまりなり葬禮に白色を用るはかあしみの時なれば美麗彩色をもとめず物をかざらざるを本意とする故なり婚禮に白色を用るは婚禮は人倫の大本白色は五色の大本也故に白色を用る故也用る所の白色は同じけれども本意は同じからず又産の時白色を用るも婚禮に同し。（貞丈雜記）

○日本にて女の歯を染むるは婚禮定りて後のとなり黒色は變らざる故に夫婦の間もかわるまじとの義なり上代には女のみに限ぎらず武人も歯を黒色にす忠臣二君に仕へずと云ふ心なり。（牛馬問）

○今の世の歌よみの詞書などに某の妻をむかへられたるをことぶきてよみておくりけるなど妻を迎ふとかくと定まりのやうあり是れ雅言にあらず古へに然いへるとなし妻をまうけとこそ書くべけれ古へはすべて男をもうく子をまうくあどゝぞいひける。（山吹の卷）

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌　第百廿九號　明治二十一年九月廿九日發兌

社説

○婦女子修身の覺悟

序、人間の心。

人々の心は其面の如く變わり、其心の働らきは身躰百種の樣態よりも雜多なり。故に、人心の尤も靜かなるは、其眠りたる間だと、其の死したるのちなり、例令ひ眠りたる間と雖も莊子の如く夢みて心忙がわしきとあり、且また死したる后と雖ども、魂魄漂遊して勝手に苦勞するとあらんとは申し乍ら、先づ此の眠り、死、と云へる二ッの折を除き見れば、人心の混雜多忙なるは、彼の大ひなる市よりも、彼の尤も繁昌なる町通りよりも、盤根錯節よりも、亂れたる糸よりも、尙ほ多忙混雜なるものと思はる」。左れば、此の心を解剖して、之が働らきの異同大小を比較するは、甚はだ困難の事とは申し乍ら、吾人は先づ其の働らきを三樣に區別し、何事を論ずるにも、大抵その三ッの方角を別にして考へ見る時、初めて餘程都合よろしき樣に思はれたり、因て只今、女性が修身の心得を辨ずる時に當りても、亦た右樣三段の分別を爲すが相應なりと考へたり」。扨て、然らば、所云る心の三ッの働らきとは何如なるものぞと問ふに、吾人が彼の音樂の音を聞とあらんに、忽焉として耳を打つは、松風か、波の音か、果た風の吹あるゝなるか、何に致せわが耳に聞えたり(第一段)、扨ては何物の響きぞと能く〳〵耳を欹てゝ聞けば、松風としては其音餘りに整ひたり、波濤としては其音餘りに急なり、風聲としては其音餘りに悲し、即ち是れ彼處の山莊に琵琶を彈ずるなりと覺られたれば(第二段)いでや之より歩みを轉じ、切めては諸籬の外よりかひ間見てなり、彼の隱者の風采を窺ひ見ばやと決心し(第三段)則ち徐むろに歩して、彼の山莊に向ふたる經驗あらんに、彼の第一に耳に聞き其音の妙なるに感じたる、第二に此の音は松風波濤風聲にあらずと覺つたる、而してのち己れ行いて見ばやと決心したる、其の働らき、多少は似るところあれども而も互ひに大ひに相違する所ろあり。依て、第一を感覺と稱し、第二を智覺と稱し、第三を決斷とは稱するとなり」。然るに、斯樣なる心の働らき樣は、凡そ何如なる時に於ても路ぼ其の區別あるように承知せらるゝをもつて、凡そ吾々の心は、いつも右三段に分れて相働らくと心得たりとも、決して大ひなる誤まりにはあらず。左れば、女學

雜誌を御覽じて、此は面白しと感ぜらるゝ、此の論は間違ひたりと判定せらるゝ、若くは斯樣の雜誌ならば引つゞき之を購讀すべしと決斷せらるゝ、其の思ひの働らきように何となく大ひある差別あるを以て、即はち人心の働らきには、右三つの分別ありとは申すなり」。隨ひて、此の三つの分別を色々に當はめ見れば、尙ほ一層に面白く感ぜらるゝものなり。先づ、彼の物に感じ、事に感じ、即はち喜ばしと感じ哀しと感ずるは、吾々の胸に於て働らくが如し、喜怒哀樂に全身を熱するとき、最初に其の温まりの起るは胸にあるなり、胸に手を置きて心配し、胸を打つて慷慨し、胸を惡ろくするほどに惡く感ずるなんど、皆是れ感じの胸に於て起るの證なり、英語に此胸をハートと稱し、吾人は一に之を情と申す、凡そ物事に於ける感じは即はち、此の胸、此のハート、此情に於て起るものとして宜しからん。次に、「事を考へ、物を窮め、即はち道理に適ひたり道理に反きたりと判別するは、吾々の頭に於て働くが如し、討辨議論に全力を盡すとき、最初に其の疲勞を覺ゆるは頭にあるなり、頭を支へて考へ、頭を振るつて反對し、大髮卷し頭を病しめて窮思窮案するなんど、皆是れ考への頭に於て起るの證なり、英語に此頭をマインドと稱し、吾人は一に之を智と申す、凡そ物事に於ける考へは即はち、此の頭、此のマインド、此の智に於て起るものとして宜しからん。最後に決斷決行の思ひを定め、即はち此は正しきが故に敢て行ふべし此は不正なるが故に敢て行はずと斷決する如きは、吾々の魂しひに於て働らくが如し、即はち全心全躰に行わたり、其の存するは何處に存するや、其の隱るゝは何處に隱るゝやを知らず、忽焉として現はれ出で、乍まち吾々を制し、亦忽焉として沒し、乍まち隱秘の奧にひそむ、魂しひの靈たるゆえんなり、左れば感じも止み、智識も磨り、全肉茶毘一片の烟と化したらんのちも、之が爲に此の靈を滅するあたわず、生きては、吾が感じ如何に強く、吾が智慧如何に高しとも、必らずしも之が爲に魂しひを強くするに足らず、彼は尤も靈妙不思儀に獨存して、恰かも天外より吾れと云へる此の我れを取締りするようには思はるゝとなり、英語に此魂しひをソウルと稱し、吾人は一に之を本心と申す、凡そ物事に於ける決斷は、即はち此の魂しひ、此のソウル、此の本心に於て起るものとして宜しからん。而して以上三つの働らきは、或は胸より發し、或は頭より發し、或は魂しひより發して、三能連合、一結して身外に現はれ來た

り、乍ちにして人を泣かせ、乍ちにして人を重くし、又乍ちにして人に決心せしむるものなり。

既でに、人の思に右三種の別ありとせば、大凡そ人間はその誰たるを問はず、皆な何れも此の三種の働らきあり即はち三種の能力あるものなれども、然れども人によりて其働らきの彼に多くて此に少なく、或は此と此とに少くして只だ彼に多きとあり」。例すれば、物事に甚はだ感じ易き人あり、悲き談しを聞けば泣き、喜ばしき談しを聞けば喜び、喜怒色に形はれて何事にも業々しき、所云る感じの甚はだ強き人あれども、此人意外に其の考へが足らず、倘ほ決斷力に乏しうして時に意氣意のあき程のことあり、之は其情大に發達して、頭まと魂しひとの尤も弱き人なり。然るに之に反し、智慧逞ましうして万事に考深けれども、極めて冷淡にして情け薄しと申すか、又は情けもあり、考も緻密なれども、始終因循にして決斷せず、即はち菩薩の如く慈悲に閻魔の如く權り乍ら、扨て之を斷行するとの出來ぬものあり、之は其頭ま大に發達して、情の伸びざるか、又は頭まも情も發達して、其の魂しひの隆んならざる人なり。更らに一つを申せば、剛毅果斷にして、物事に熱心なれども、何分に人情よ頓着せず、而も其の考へ方の甚はだ疎鹵ある如き人あり、又は彼の男達の如く、氣象も盛んあり、人情にも厚けれども、扨て物の道理に至ては殆んど之を細考するの智慧なくして、只だ感じたるまゝよ敢て斷行する類の人あり、所云る慷慨悲憤の人、もしくは死士壯士敢死の士あどと稱する英雄方は、多く此の仲間ならんとは推察せらる、即はち是れ其の魂しひと其情との發達して、單り智力の伸びざるか、若しくは魂しひ獨り伸びて、其の情と智力との發達せざる人あり。」人心はかく偏よりて發達するを不可とす、若し其情のみ盛んならば、甚はだ感じ易き弱き人と爲るべし、若し其の智のみ盛んならば、甚はだ冷淡なる不人情の人と爲るべし、若し又其の本心のみ盛んならば、甚はだ剛情なる前後無頓着の人となるべし。左れば、三種の能力、成るべく一樣に伸び長じたるをば、即はち完全したる人物、立派ある人間と申すとである。

茲に總理大臣として吾人の目前に立つものあり、又軍務大將として吾人の目前に立つものあり、天下第一の金傑として又た吾人の目前に立つものあり、何れも皆な吾人が敬愛する所の人なりとは云へども「吾は人間なり」と稱して出で來らるるの人は、即はち吾人が尤も敬愛する所ろのものである。蓋

し、上帝以下森羅萬象の間だに立つて、吾は人間なりと云ひ得る所ろのものほどに尊きはなし、蓋し大將にして人間ならぬ人もあるべし、高官にして人間ならぬ人もあるべし、然れども凡そ人間にして、大臣大將に劣る所のもの決してあるなし。左らば人よ、汝ぢ先づ人間たれ、人間と云へる名稱ほどに、吾々に立派ある稱號はなきなり、而して眞正の人間たらんと欲せば、即ち人間固有の三種の能力を、極めて正當に發達せざる可らずと覺悟せよ。

覺めよ、吾がセンジン、小事は惣べて、卑しき思ひと王達のほこりとに任せん、見まわして而して死するが人生たらば、吾々をして請ふ此の人間を細論せしめよ（ポープ）

論說

○印度の女傑蘭梅夫人　　佐々木豐壽子

非常なる不幸の世に生れ、非常なる災害に逢ひ、又非常なる困難を成しつゝ在りて、而して尚ほ非常に未來の望を待ち居るものは、今吾、その印度の女傑蘭梅夫人一身上の事柄なるとを知るあり。

蘭梅夫人は、印度貴族の家に生れたれども、同國の國風として婦人を遇待する慘酷の習慣に苦められたると多し、夫人は此幾多の慘酷を經過し來りて（女學雜誌第二百十一、十二號に詳かなり）、いよ〳〵印度の習慣中尤も災害甚しきものを取除かんとは盡力せらる。此は「幼時命令の結婚」と稱する、いひなづけの事にして、凡そ結婚年齢前六七歳より八九歳までにても、已に父母の命令を受たるは、即ち偕老の夫婦にして若し其男子早く死没せば、女子は寡婦と成行て終身人中に立出づべからず、又此不幸は宿世の罰なりとして、印度全社會の擯斥する所となりて、哀れはかなき悲みに一生の餘命を送るに至るのみならず、此習慣遂に幾百年となく積みかさなりて、此の寡婦を遇待するに慘酷と虐待とを兼ね併せたるに至れり。

蘭梅夫人は此事の慘酷を經閲し來れる人あり、滿目の悲哀うつとうるに所なく、此印度幼年やもめ（現今印度に幼年寡婦極めて衆し）の弊風を改革せんには、先づ印度人中のパイカスト、即ち貴族を教諭するを第一とす、此貴族は一種家傳の宗旨を固く保守して、他の下級なる種族と交通せず、かくて彌々世の事情にうとくなるに從つて、益々家法を固守し、幾萬の幼年寡婦は、讀經拜佛の外は生ながら死躰に均しきまでに沈没するに至るとなり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

蘭梅夫人は此弊風を救濟せんには、先づ印度內に貴族婦人師範學校を設立して、此幼年寡婦を訓諭敎化して敎員と成し、後大ひに成す所あらんと欲し、二三同志の人々の贊成を得て今を去る六ヶ年已前歐洲に渡り、後米國に渡りて、辛苦勉勵今年サンフランシスコを解纜して、本國印度に歸らんとす、夫人は我が日本に立寄て米國婦人矯風會のもよふをも話し、同夫人の思想をも演べらるゝなるべし、思ふに夫人再び本國に歸らるゝの后ち、其國永年の癖として、婦人の敎育は無用なりとの心得より、種々雜多の防害を加へられ、又此後も與へらるゝも測るべからず、且又米國の宣敎師中にも夫人の事業に全く反對の考を懷きて、之を勸告して停止せしめんとし或は其友人中に私かに廻章を出して蘭梅夫人に贊助すべからずとまでに、擯斥せらるゝものもありと云ふ。

然るに昨明治二十年、西曆一千八百八十七年米國ボストン府に一會社を組立て、蘭梅夫人の爲に向ふ十ヶ年間義捐金を贈り、夫人の素志を貫徹せしめんとて、篤志の仁人紳士相集り、蘭梅アッソシエーションと云ふ會を設られたり、又同年同國各府に於て、蘭梅セルクルと云ひ、義捐金を十ヶ年間寄贈すべき定約の會を設立せられ、篤志の人々より每年贈金せらるゝもありと云ふ。

此頃米國婦人矯風會の會頭ミス、ヰルラード君より、余に宛られたる私書の中に、蘭梅夫人の事を記し、

余が友人中、尤も慈愛ふかくして、尤も親愛あるは蘭梅夫人なりと、

記されたり、夫人が高尙ある思想は、此一言によりても信を措くに足れりと云ふべし。

ヰルラード君の書中又た、

蘭梅アッソシエーション　壹葉
蘭梅セルクル　壹葉
自著ハイカスト、印度婦人　壹葉
兩半球の批難　二葉

を贈られたり、因て右蘭梅夫人演說兩半球の批難と云ふものは、夫人苦心の一端をうかゞい知るに足らんと、左に之を譯して女學雜誌の編者に呈す。

○兩半球の批難

蘭梅夫人演

今吾此の演說を爲すに當つて、諸君をして悉く滿足せしむる事は極めて難きものありと信ず、東西兩半球の學士紳士諸君は、余が計畫に向て評論せられ駁擊せらるゝとのあらんは、

固より余の覺悟する所なり。

余が此事業は、始より獨立の方向を一定したる故に、世の反對駁擊を受るは至當の事に似たれども、余は常に遭遇して避べからざる困厄の性質を、一二ケ條明瞭に擧げて、之を歐米の諸友に訴ふるは、余彼事實を明かにせんと欲するの望あれば也。

余は我が印度貴族幼年寡婦の爲に學校を設立せんと欲し、本國二三の人の贊助を請ひて、今より六ケ年前本國を發し、遂に英國より此の米國に渡航したり、爾來印度にある諸雜誌及び新聞は、多少此女學校計畫を評論せられたり、中に就き彼等が余の改宗してキリスト敎に歸すると聞くや、口を極めて罵詈し、鋭き劔を以て攻擊せられたり、抑も人の信仰を改むるの一事は我が印度人の最も忌み嫌らふ所にして、過般印度國內に婦人學校を建る事に盡力同意せし人々も、之が爲に、今は反對の地位に立ち駁擊せらるゝに至れり、彼等思ふに、若し寡婦に充分なる敎育を施こして、之に言行の自由を與へたらんには個々勝手に其自由權を宗敎上に波及せんも知るべからず、因て早く今の內に其萌芽を摘み切りて生育せしむ勿れと云ふにあり、並し頑信の印度國人は、他宗徒なるキリスト敎を奉ずる敎師より敎を受くるを尤も惡む所となし、愛する娘親しき姉妹の上に宗敎上の勢力感化行われて、印度固有の宗旨を改むるに至らんかと掛念し、たとひ學校敎則の劣るあるとも、寧ろ左樣の氣遣なく、敎授を自家宗旨の敎師に依賴するに若かずと覺悟するに至る、豈歎息の至りならずや、印度人の余を疑ふ專ら此邊にあるなり。

余は本國に於て如此く冷遇さるゝの已らず、又他の一方にある文明國たる歐米の多くのキリスト敎友諸君は、我が寡婦學校の普通敎育を施すを不足とし、又何れの傳道會社に屬せざるを痛く排斥して、叫んで曰「彼婦人は我輩の意見に從はずして、我意を飽までも主張するものあり」と、其意蓋し、我等が何事を成すも、凡そ自から獨立して爲さんとする者は皆な之を嚴禁せんとするものゝ如し、又彼の人々は或は廻章を以て我等の計畫を阻ひ、キリスト敎徒たる婦人は、一切闌梅夫人を贊助すべからずと約束せらるゝに至る、此時にありては、自國印度人よりはキリスト敎に改宗せしとて猜疑を受け、又最愛善心なるキリスト信徒諸君よりは、校則の普通なると傳道會社に屬さゝるとに由て惡しみを受け、東西より受くる駁擊は恰も石臼の間にありて上下より壓し潰さるゝ如きに至

れり、（譯者曰 蘭梅氏設立の師範女學校規則第二條に、宗教に關係せざる普通の書類を教授すとあり、故に宗教家の排斥あるものあり）。

過し頃、我等は書面を寄せて宣教師某君に我が爲に少しく贊助せられんことを請ひたり、其答書は大抵のキリスト教徒の意見を代表するものゝ如し、其文に曰く「吾輩の見る所、蘭梅協會の目的は、全く傳道會社と關係せざる純粹の普通學校を起さんとするものにして、全く一己人の資格に屬するものなり、又其金銀の出入も、正當なる使用を撿査する社友なければ、到底此の計畫は孤立して宜しく獨行すべく、敢て世の有識者の助くべき所行にあらずと認るもの也」と。

夫世間にて、宣教師始め紳士諸君が、我計畫を孤立せりと認めらるゝは誤りにして、辨明を俟たず、我が會社には、有名にして勢力ある紳士貴女ありて、共に供に我が學校督責撿査の勞を取られたり、且此人々の證明を以て金銀を使用し來るものなり。

又彼の紳士諸君は、我等を助けざるを正理なりとして、更に他の證據を擧げられたり曰く「彼の婦人（蘭梅を云ふ）の計畫は、實に幾何の價値をも有せざるものなり、彼が成さんと志ざす所の事業は、決して今日まで擲うち置たるものゝあらず、見よ今印度國内に、我が米國傳道會社の關係する學校は已に十七の多きに達し、生徒は殆んど一千人に及びたり、貴族女子も、ボンベー、プーナ、カルカッタ等の都府に於て教化を受けたるにあらずや、故に今夫人が此擧を以て全く嚆矢と云ふべからず、尙ほ吾輩は斯る事業に關係せずとは云ふ可からず」と。

前文の大意を概するに、凡そ純然たる普通學校を起すものは之を助くると無用なりと云ふに均し、余は此の如き駁撃にも拘はらず、我が計畫は、傳道會社の爲さるゝ所と決して同一ならざることを主張するものなり、拙著「貴族印度婦人」と題せる書中末章を一讀せられたる諸君は、余が思想と傳道會社の爲す所の計畫を比較して、兩者の間自づから判然たる相違あるを覺らるゝや疑なし。（未完）

莊周は粟を借れんとして其身を枯魚に擬したり。東方朔は苦饑して死せんとせり。太史公は罪を贖ふ爲の賂金なくして腐刑に就き。東郭先生は雪中を行くとき足指盡く露はれたりと云ひ。郭林宗は衣一幅を以て出入に用ひたりと云ふ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

批評

○近時の女學論

（一）。魏志の倭女王は神功皇后に非ず。

文第八號第九號に、那珂通世氏の「日本上古年代考」を載す、其中、第十節に左の一說あり、

神功の年代を近肖古の時と定むるとにつき、必ず起るべき一ッの駁論あり。そは、魏志の倭人傳に載せたる倭女王卑彌呼の時代は漢魏に跨り、略神功紀に合へるに由り、卑彌呼を神功の御事なりとする說にして、紀の紀年を維持せんと欲する者、必此の女王を引て證せんとするなり。

然るに、卑彌呼を我が神功に較するに、同じく女豪傑たるの外には其の行事に於て一つも我が神功らしき所なし。「卑彌呼年已長大無二夫婿一有二男弟一佐治レ國」と云ひ、「自レ爲レ王以來、少レ有二見者一以二婢千人一自侍」と云ひ、「卑彌呼死、更立二男王一國人不レ服更相誅殺、復立二卑彌呼宗女壹與一年十三爲レ王國中遂定」と云へるが如きは、いかに附會するも、神功とは似もつかず。且其の記載頗詳密にして、徒に風說傳聞を錄せしとも異なれば、益神功とは全く別人なるを知るべし。

神功の事業と云へば、何を差し置きても。第一に征韓の役を揭ぐべき筈なるに、魏志に此の事を一語も言はず。又韓史にも卑彌呼來聘の事あり。卑彌呼若神功なりせば、和好の使聘よりは、寧來侵とか來寇とか敵害の舉動をこそ記すべき筈なるに、少しもさること無し。魏の司馬懿が遼東を平げたる歲、卑彌呼使者を遣して魏に朝貢せしめければ、魏の明帝此の女酋を親、魏倭王に封じ、金印紫綬を假し、賜賚甚厚かりき。其の後貢聘絕えず、魏の使も亦再三其の國に至れり。若神功の御時に此れ等の事ありせば、いかでか後世跡方もなく其の傳を失ふべき。

蓋し漢魏の際は、神功の御時に先だつこと百餘年にして、景行帝の西征よりも前に當るべければ、筑紫の地方は未皇朝に從ひ奉らず、梟帥、魁師、處處に割據し中には景行紀に見えたる神夏磯媛、速津媛などの如く、婦人にて一方の雄長となれる者もありけん。

魏志に謂へる女王も、此れ等の女酋が外國に對して自ら邪馬臺國主と稱せしなるべし。又彼の女王の居たりと云ふなる邪馬臺國は皇都の在りし大倭國にはあらず。魏の帶方郡より邪馬臺までの路筋を記したるに、對馬一支（即壹岐）末盧（即松浦）伊都（即伊覩の縣）等を經て南をさして至れる由に云へれば、女王の都の在りし所は筑紫の島の中なりけんことは、本居宣長も既に委しく論じたり。

且つ神功は皇后若くは皇太后にてこそましませ、固より女王にてはましまさず。應神帝の御幼きに由りて一時は大政を聽こし召されしなるべけれども、終身物せられしには非ざるべし。前に引ける菅野眞道の上表の續に「輕島豐明朝御宇、百濟國主貴須王遣二其孫辰孫王一來朝と云へり。豐明朝とは應神親政の御世を謂ふなり。神功征韓の役は近肖古の世にありしこと明かなるに、其の子近仇首の時には既に豐明朝となれりとすれば、大后の攝政も當分のことにて、長くとも二十餘年に過ぎざるべし。されば古事記は應神の段を以て直に仲哀の段に接したるを紀は別に神功の一紀を立てゝ、崩御に至るまで六十九年の間、儼然として一女主の如く記したるは何故ぞや。魏志の倭女王のことは固より神功の年代の徵證とするには足らざれども、紀の撰者が隨意に神功の年代を定むるに當り、外史に女王の事あるを幸とし、事さらに之と同時頃に記たるやも知れざるなり。

蓋し然らん。然れども兎に角、かゝる女丈夫の現出したるとは確かなり、而して其の女丈夫の日本島內より出現したるとも亦確かあり、驚歎すべきは勿論なり。

（二）。婦人言論の自由を讀みて、　美妙齋

佐々木豐壽子譯「婦人言論の自由」は、本誌第百廿一號に於て既に之を略評したり。然るに社友美妙齋主人は近日本書の爲に、左の一首を詠ぜられたる由なり、

かをる、がはな、のまこと　なり。
つゆ　のみ　ふくむ、が　つとめ　かは。
たゞ　はづかしく　ゑがほ　たれ、
いろ、を　かざれる　のみ　ならば、
その　うるはしき　くちびる、も
みづ　盛る　鉢に　ことならじ。
さうふ　みづ　まつ　うきくさ、の
すれ　ならねども、をり　あらば
かぜ、に　つれても　かをれ　かし。
なごり、の　あめ、は、　見よ、　過ぎて
あらひいだせる　つき　しろみ、
ふせや、は　いかに、　うめ、　のかげ。

女學子評。作者の詩も亦た、花の言いふ如くです。

雜評

一。日本現在國家哲論　有賀長雄氏著　東京牧野書房發兌

緒言、純正國家想念、日本國家特狀、帝權の制限、現時國家の急務、權利國家及び政事國家の六節に分ち、日本現今の景況に迫られて、有賀君得意の哲見を出されたり、國民個々が其インヂビヂュアリチー(保獨力)を發揮すべきを論ずる所ろ痛快と云ふべし。著者歐米に遊び、特に米國の事業を見て大に通俗になられたる所あり、最後に至て文學叢書孔門哲理の論と矛盾せず云々の一辨、其苦心の一斑を見るべし。(三十錢)

二。實用英語學初步　サトー氏著　東京吉岡商店發兌

再版のよし、百二十余頁あり、英語會話の初學者には便利なるものなり、ワイコッフ氏の同會話書に似て、而して稍や精密なるものなり、然れども其の順序、調整、の一事に至ては果して彼の書に優るや否やを知らず。(三十錢)

三。實地適用蠶桑要論　小柳津民治 男友治 同著　東京學農社發兌

多年實地に經驗し、且つ能く學理に考へ合されたるの著者に成れば、實に申分なし、三百六十頁と五十四節に分ち、蠶業の沿革、生理、飼育法より、蠶病、培桑等に至る甚だ至れり矣。(一圓四十錢)

四。泰西奇談嵐の卷　蘐莉野史譯　東京丸善發兌

シェクスピアの院本テュペストの大意を抄譯ありたるものにて、前の女房持虎の卷、冬物語等に接すべきものなり、閑時一讀するに甚ハだ面白きもの也(八錢)

五。小田原相談　久保田榮氏著　小田原石壽堂發兌

農民奬勵策、住民の勤勞、婦女子の教育、住民本心の改良、と云ふ四ッの議案を發し、將來の小田原の爲に、小田原評議を爲すに托し、久保田氏が同地の爲めに抱く改良策を辨ぜらる。聞く、小田原評議とは小田原を非りたるの語にあらすと、然らば此の相談も亦實際に行わるゝの日あらんとを希望ず(十錢)。

叢話

○男女交際の作法　箕作佳吉

左の一篇は箕作博士が「嘗て某女學校に於て爲したる演說の大略筆記なり」として吾人に惠送ありたるものなり、玆に掲げて讀者諸君に示す。

余嘗て或る書物にて讀みたるとあり往時米國に人あり其頃大審院長の役を勤め居たる某氏の許に來り新に設立したる一會社の株を買ひ入れんとを勸めたるに某氏答へて曰く若し余が此會社の株を所有せば世人ハ必ず余が賄賂として之を受けたるならんと云ふべしと其人曰く縱へ世人ハ何と云ふとも實際然るにあらざればハ何ぞ世評に懸念するとあらんやと某氏曰く否然らず余の位置に居る者ハ不正なるとを爲すべからざるハ勿論のと他より見て不正と誤解するの恐ある所業をも亦謹まざるべからずと實に公明正大なる裁判官の言と云ふべし」事柄ハ異なれども彼の有名なる Caesar's wife must be above suspicion(シーザルの妻にハ一點の疑をも容るべき所あるべからず)の語ハ仝種の思想より起りたるなり。

さて婦女子ハ温柔優美にして其所爲思想共ゝ純良高尙なるべきが故に若し不幸にも一度世上の惡しき評判を受くるとあれ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ハ縦へ其評判ハ全く無根の虚説なりとも世人ハ何となく穢れたるが如くに感ずるものなり此點に就てハ男子と女子との間に大なる差あり男子ハ不品行にして隨分落ちぶれ世人より仕方なき奴の評を受くるも一朝悔悟して何にても夫相應の事業を眞面目に仕出す時ハ世人も前の過を容捨し自分も自ら重んずるの心(Self-respect)を恢復し再び社會の中に立つことを得るに至るなり之に反して女子ハ一度醜行ある時ハ如何に悔ゆるも最早恢復の期なく生涯日蔭の身となりて世の中に顔出しも出來ざる事となるなり縦しや全く無根の事を云ひ噺されたりとするも何となく穢れたるが如く後より指をさされ恰も透明なる結晶に曇りの起りたるが如し何故に社會は此の如く男子に寛にして女子に酷なるや是ハ公平なるや不公平なるやハ茲に論ずるに及ばず何れにせよ我邦にても歐米の諸國にても此の如き事實あることハ疑ふべからざるなり。

婦人の名譽ハ此の如き脆きものなれバ何れの社會にても誰云ふとなく自ら定りたる法則ありて社會の交際を制し婦人を保護する様になり居るなり此法則ハ別に政府より發したるにも非ず輿論の適宜と認むる所より自然落着せしものなり之を守る者ハ安全に暮すを得之を犯す者ハ政府の法令を破りたる者と其苦み殆んど仝じかるべし是實に社會の秩序を保ち家内の幸福を全ふするに欠くべからざるの要具なり而して此法則の嚴しさは社會の進歩と反對なるものなり社會の程度低き時は交際の法則究めて究屈にして東洋の或る國にては一般男女の交際は全く之を禁ずるの姿なるものあり之に反して社會の徳義進みたる國に於ては男女の交際も自然に盛にして又此の交際を制する法則も寛にして事足るなり歐米の諸國の如き即ち是れなり然れども一口に歐米と云へども其歐米の中にても大なる差あり例へば佛國にては輿論未婚の女子を束縛すると頗る酷なりと聞く英にては較寛にして米に至りては最も寛なり此の如きとて米の處女は不品行なる者多く佛には品行方正なる者而已なりと云ふべからず其究屈さの度は國々社會の有樣に從ひ自然淘汰の理によりて定まるものなり然れども最も寛なりと云ふ米國にても決して放擲とは云ふべからず余近頃同國ブリン、モール女子大學校の事を記したる文中に男子の同校生徒を訪問するものあれば之に面會するには豫め設置せる應接室に於て爲すべく且其校の老女必ず其席にあるべしと云へる規則あるを見たり抑も同校は米國女子大學校中最も進たる者にして男子の ジョンス、ホプキンス大學校に比すべし生

徒は既に他の大學校を卒業し其年齢も廿歳以上にして既に自ら分別の付きたる貴婦人なり然るに世界中に男女交際最も自由なるの評ある米國にて此の如く最も高き教育を受けたる婦人を束縛するは蓋し其社會に行はるゝ法則に從ふの要あればなるべし思ふに前に述べたる大審院長の説と全じ理由に出たるなるべし。(未完)。

○仲　秋　無　月

去る廿日の夜は、舊稱を八月十五夜と申し、春宵夏月の景色たゞならぬ中にも、分きて有がたき佳觀として文人墨客の待ちに待つべき節なり。然るに府下は、當夜濃雲漠々として、月光空しく黑幕の上に照り、彼處には定めて物すごき程に靜かに且つ明らかならんと想像せらるゝものの、我が下界には少とも其光を洩らして吾を訪らふとなし。むかし、仲秋の月を待ちたる文人あり、生憎宵より雲凝つて見へざりければ、

一と年の月を曇らす今夜哉

あくる年、八月十五夜となりて復た月を待つ、此度は一天清く霽れ渡つて、心にかゝる微雲だもなし、則ち亦た打吟ずるようは、

一と年の月を曇らす今夜哉

○佳人、少年に答ふ

前略、こま〴〵と御深切にものせられ倘ほ過分の御辭ばを寄させられ背に汗する心地しておそる〴〵拜見いたし候妾わ事なか〴〵御仰せの如きものには候はず不肖至極として毎度父母より敎へを蒙り候まゝ何卒日に〳〵心掛を直して切めては親供の心丈だに安んじたくと存じ居候へども性來の愚鈍にて自分の思ふ半ばには相成申さずつね〴〵口惜しきとに存じ居候、それゆへ御前さまがいろ〳〵と御申しの事は全く妾を見違へ玉ひての御見當にて俗に申す買かぶりとやらに候半過日も經濟雜誌にて崇拜論とか申したる議論をなされ今の若殿輩は兎角維新前后の元勳を崇拜して恰かも神田の若いものが明神に對し參らするようたい分もなく有がたがるとにて大同團結に騷ぎまわる者も少と此邊の氣味はなきやと申されたるよし承わり候此取邊もなき少女子に餘り大したる御望みを掛させられぬよう願上〳〵、然し人は皆ほめらるゝとを樂しみ候まゝ妾とても成べくは惡く言われず久しく御ほめにあづかりたく存じ候まゝ此后ちとも矢張り遠くより御覽遊ばされ餘り近く御吟味なきようねぎ上〳〵そは昔しラスキンと云へる美術家の言に名山

名所は近づいて見るべからず遠くより離れて遙かに之を望めば凸凹の峯も谷も枯れたる草も木も丁度程よき加減に調ひ和して甚はだ美しく見ゆるものぞと仰せあり彼の西行法師が富士山の麓に止りて特更登り玉はざりしは必竟こゝの意味かと存じ候、それゆへ御前さまも何卒矢張妾を近づけ玉はず元の如く遠くより御ながめ下され相應の御ほめ言葉を下し置かるれば冥加此上なきことぞんじ上まゐらせ候、以上御文に對し過分の御褒辭を返上し尚ほ交際の御もとめを否み奉まつり拙なき筆もてあら〱かしく。

○一時間にても儉約する事

西洋には、時是れ黄金と申す諺がありまして、時間は金錢同様に價ひあるものと云ひますが、中々金錢同様所ろではなく、迚も黄金などが及ばないほどに尊といものであります、金錢は失つても亦た歸ることがありますが、時間は一と度び去れば決して復た歸りません、夫故光陰は矢の如しとも申しまして、實に尤も之を大切にせねば成らぬ者です」。先づ一例を擧て其の趣むきをお話し致そうならば、アナタ方、一日に一時間位ひは何でもない事、時々は晝寢を爲さり、時々はチシヤベリをも爲されて、何に一時間位はと仰しやることが御座いませう。が此一時間でも、もし積りに積れば實に莫大の年月となります、假りに十二三より十八九即はちお嫁入なさる迄を七年として算へて見まするど、一日に一時間は一と月に三十時間で、一年に三百六十五時間、即はち大抵三十日の餘です、夫故之を七年にしますれば丁度二百十日で月にすれば凡そ七ケ月、言はゞ半年と一と月に成ます。而して此の半年と一と月を矢張り例の如く無駄に遣つて仕舞へば、モウお談にもなりませんが、若しキツト心をつけて之を用ひまするど、此間には、イロハを知らなかつたものでも日用の手紙が書けるように成り、西洋のエビシも知らなかつたものが第二讀本位は讀めて西洋人にちよつとした談しでも出來るほどになり、又若し金があつて外國が見たいと云へばアメリカ迄では四五度往復することが出來ませう、英吉利の倫敦へも三四度行つて來ることが出來ませう、若し世界中が見たいと云へば緩りと二へん世界各國を一週して其上四五十日位どこかで滯留して遊山しても宜しひほどでせう、或はもし此間だに衣物を縫ましたら、一日に一枚單衣を縫ふとして凡そ二百十枚も出來ませう、二日に一枚袷を仕立るとしましたら、左様、百五枚は出來ませう、若し又三日に一枚の綿入を仕舞う手ぎわとしても多分七十枚は

出來ます、然し幾らお嫁入の仕度でもコンナには入ぬと仰つしやれば、此の間だの時間に何か仕事をして其丈けの賃を取るとゝなすつたら、一日二十錢の取えとしても四十何圓と云ふ貯金が溜まります。かように、十二三即ち物心のつく比より十八九と云ふ他所へお出でになる比迄でに、一日一時間づゝ儉約なすつたので、つもり〱て斯くも莫大の仕事が出來ませう。然るに、誰も十八九で中々死ぬる心持はないのですから、先づ六十迄で生くるとしても、一日一時間の儉約は合して四年と何日と云ふ日數になります、四年かゝれば大學の卒業が出來、古來ゟ名高き發明も出來ますだらうと存じます。其故一時間と云つても決して無駄に費しては成らぬとです、ちよいと、お友達の事を評判するうちでも一時間は立ます、普段譯もないとゟお化粧をしたりおつくりを仕たりなさる中にはキット一時間二時間は知らぬ間に立ちます、然るに斯る事に費すべき一時間〱の時をつぎ合せて、さて此を何年と云ふ年月で織立てますると、實に人の目を驚かす立派の錦きが出來上りませう、書生方も、細君も、何方も決して時間を粗末にしては成りませぬゾ。

高山に登らざれば天の高さを知らざる也(荀子)

○泰西美術小話　(二)

山田美妙齋

第六、羊　其形はだうだか明解りませんが、耶蘇教に關した謡のはじまッてから以來、救世主の符號となッて居るのが羊です。概して言へば羊は純粹、清淨、無罪などの意味に用ゐ、また十二弟子をも各々羊であらはします。第十三の弟子は即ち基督で羊の頭に十字架を付けるか、或は後光を添へます。

第七、孔雀　是は重に葬か葬儀の符章に用ゐます。是は濁世から淨土に移るといふ意味に用ゐるので、素は偶像宗の方から來たさうです。全躰孔雀はジューノ(神の名)に屬する鳥とさだめてあります。

第八、鳩　これは天女或は神女に付いて居れば純粹潔白といふ意味で、死人の口から飛出す躰になッて居れば魂の符號です。愛らしく、品格のある鳥だけに意味が優美高尚です。

第九、船　むかしは「アルク」(ノアの船)はクリスチアン、チョアチの符號でしたが、今ではどの船でも全じ意味になッて居ます。

第十、後光　これは甚複雜した意味ですが、大要を申しましやう。一口に後光とは言ひますが、これに三種類あッて、その三種類とは「ニムバス」、「オーリオール」、および「グローリー」です。第一の「ニムバス」は頭の周圍にあるもので第二の「オーリオール」は身の周圍にあるもの、そして第三の「グローリー」は第一と第二とが二ッ合したものです。之については米國の「クラヽ、アースキン、クレワント」女史の解釋がよく要領を悉して居ます。

「ニムバスはすべて神聖な人」、女史は言ひます、「信者ならずに神の形に付くものです。嚴格に言へば、「オーリオール」はたゞ神の頭につくもので時に、「ヴアージン、メーリー」にもつきます。「ヴアージン、メーリー」ゟ付く場合は(一)メーリーが救世主を抱いて居る時、(二)最期の裁判に立合ッて居る時などです」。符號の中の重立ッたものは一寸述べましたから是からは彩色の事に移り、その間なほ説洩らした符號をば、必要に應じて解きましやう。

第二　彩色

彩色といふものは最も早く人の目ゟ感ずるもので隨ッて思想が單純であッた往昔でも色といふ物には非常に混雜した意味を添へてあります。

第一、白　蘇生後の基督の服はこの色で、婦人に用ゐれば貞操といふ意味です。つまり概せば「清淨」といふ處から轉じた思想で、さらに白ゟ象ッて金剛石や銀を用ゐ、これに全樣な意味を有たせてあります。

第二、黒　白と交はれば謙遜或は悲哀の義、たゞ黒ばかりなれば猛惡、暗黒、或は死の意味で、そして隱士たちの普通の色です。

第三、紅　忠義、神の愛、創造力などの義で、更に又血、憎惡などの義もあります。この紅と白と交はれば愛情、智慧などの意味で紅と黒と交はれば魔王猛惡などの記章です。

第四、黄　主に太陽の色で、その他末頼もしさ、妹脊の固めなどの意味です。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

たゞ猶太人の服色にも之を用ゐますが、これは不潔といふ事に用ゐたのです。
第五、紫　情欲、困難、愛情、眞理などの義でマドンナなどは此色の服をつけて居ます。
第六、綠　春の色で卽ち企望、勝利、よろこび、たふとさなどの意味です。
第七、鼠　かなしみ、謙遜、などの意味です。

〇一唱百歎

久坂通武

ほとゝぎす血になく聲は有明の月より外にきく人ぞなき

新納忠元

今昔二十七春風、吹入雪花復紅、豈莫三分割據畧、英雄不顧草廬中。

武田耕雲齋

うすもみぢ赤き心をとはれては散でなか／＼耻かしき哉

小説

〇哲女の卷　月の舍しのぶ

第四回　幻（下）

然し叔父さん、生物學で微かい所ろを吟味しますれば那ほどに能く整つて居りまするし、又天文學で廣ろい所ろを調らべますれば此程に（机上の書籍を一瞥して）能く行屆いて居ますので、之は是非、神と云ふものが支配なさると思はなくては成らぬやうで御座います。

イヤ、夫が俗物の惑ひで、ナニ別段に神などと云ふ自然外の者のあらう筈は無い、ソリヤア素より神と云はうが上帝と云はうが名目は搆わない、詰まり自然力の事だテ、ダカラ此後一層學術が進んだら、今日不思議に思ふたとも追々と分つて、神の力らとした事が、尋常普通の道理であつたと知れる樣に成るのです、ソンナ迷ひに決して拘はつては成りませんぞ。

ハイ、元より學術は學術として研窮しまして、何も神を信ずるより之を怠たると云ふとは御座いませんので、私しの考へますには、成程學術は此後いよ／＼進歩も致しませう、致しませうが然し、夫は只だ實物の發達歷史關係等を調らべまする迄で、到底其の第一元因と申すものを見出すとは出來んと存じます、夫故、信仰が學術の研窮の妨げともならず、神ありとしましても別段その……

イエ、イカン／＼、大ひなる間違ひです、第一元因が到底分らないと極るのが既でに誤まりで、若し人智によつて研窮し得べきものならば、卽はち之を研窮するが學術の務めであらう、若し又研窮の出來ぬものとあらば、其の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

研究の出來ぬものを何によりて信仰するか、且し信仰するとしても研究せざるものを信ずるは既でに學術家の精神に相違して居る、ダカラ一方に學術、一方に神です、此と彼とを矛盾せぬやうに共に確認するとは決して出來ん道理です、お前が早や第一元因は學術で分らんとだと定た丈けが、既に神を信ずるによつて學術心を失ふた證據です、斷然そのやうな考はお止なさい。

嗚呼此の老人よ、汝ぢは實に其心中に神なしとする乎、若し神なしとするに斯る薄弱なる議論によりて能く滿足せば、汝ぢの學識は實とに愍れむべきものなり。若し又別に意あつて、故意に無神の妄說を主張するか、ア、汝ぢは實に恐ろしき人物なるぞよ、既に哲女の温情を滅し去り、又其の幸福を剝ぎ去り、倘且つ其の財產を失ひ去りて、而して今ま亦た其の最后の寶玉を奪ひ去らんとす。

哲女は理を窮むる甚はだ細密なれども、其の窮理の學力を與へられたるは皆な此の老人の敎へによるが故に、其の敎へに由て蓄へたる武の具を以て、則ち此の當の先生の論說を駁する能はず、否な啻に能はざるにあらず、決して毫末だも之を駁し得べしとの信仰をば有せざるなり。左れば、今ま此の說を聞て、心裏濛々として殆んど是非を辨別すると能はざるに至りぬ、只だ一物の倘ほ遺りたるは、「此れ叔父の敎へ也」との記臆なりける、故に朦々の心裏遂に一言を壓出し、

左樣で御座いますか。

との最后の信認をば(嗚呼殘念なり)遂に定めたり。

暫時無言なり、此間だ老紳士は屢ば哲の樣姿を窺ひ、扨て漸やく貌を和らげて、

時に先づ其話は其丈として、斯く大學の事が不成功と窮れば、之から后の事を考へんければ成らぬが、兼て斯うもあらん折にと用意して勘考して置たとは、致方がない之から一つ札幌に行ては何如かと思ふのです。一躰東京は學術の研窮に面白い所でもないが、北海道は未だ學者の手の深切には觸れない場所で、余程面白い材料が今に隱れて居るやうだ、幸わひ札幌の農學校から私にアストロノミー(天文學)の敎授を賴みたいと言つて來ても居るしお前の躰だの爲にも彼の地の方が宜しひと思ふから、二三年アチラへ移住するとしても何如です、ドゥ思ふか。

別に考へもありません、よろしひように。

極めて勢力なく述べ去つたり。老紳士は常に無く優し氣に、

機嫌を取るようにして、
然しお前の考も十分に聞たい、贊成かチ。
別段不同意などと申すとは御座いません‥‥が　萬事叔父さんのよろしひようになされまして。
そうか、それで安心した、夫れでは成べく早い方が好ので、月末に船が出る筈だから、夫に間に合ふ樣に仕たい、其つもりになさい。

頑僻の老人近來頓かに去意を急にしたり、凡そ氣質に頓はかなる變化を生じたるときは、即はち其の人の一身に尤も大ひなる變動のありたるとを知るべし、然れども哲は彼を父と見做し、教師と尊崇し、保護者と委賴し、元來無經驗の心を更らに無頓着にして、敢て一點の疑ひを狹まず、只だ言はるゝまゝに信任したり。ソワ〳〵としたる老紳士は、又もや元の如くプロフヘッソル(教授)の風采を恢復し、時計を見乍ら、
哲、モウ十二時です、よろしからうデ。
何事の宜しきぞ、此の一言を聞て哲は靜かに立上り、傍はらに置いたる上衣を取て上より被ひ、更らに方一尺大の大帳面を机の引出より取出で、右手に鉛筆二本を握り、叙々として正面の窓に近づく、鍵を一轉して音鏘然たり、月光射入したり、女學士は出でたり、窓戸再び閉ぢらるゝとき幽かに彼れが天文測量に從事するの風躰を見たり。
老紳士は、戸の閉ぢられたるを見て長椅子より立上り、テーブルに近づいて、コートの隱くしより書狀の巻かけたるを取り出で、首を伸ばし、目を細くし、恰かも燈火に捧ぐる樣にしたる書狀を讀み下すに、
‥‥過日は私の尤も親愛する友人三人にお賴み申し、學校裏の最と靜かなる所ろに參り諸共に祈禱いたし候、先づ第一に父上樣の御躰だ健やかに居まして何卒平生の御心配の少しにても減ずるよう、次に哲さまの御心持和まりて神への信仰すゝみ候ようと涙に咽びて祈禱いたし友人等も皆深切にいのり呉られ候哲さまは私しと違ひ幼年の時より父上の御教育を受られたるとゆへ信仰は言ふ迄もなく萬事の御心がけ立越へて在り玉ふべきに反つて父さまの御心配のみ多きよし承まり實に〳〵悲しく覺へ候哲さまは毎日〳〵御ろばに在りて何とも思し召さず私は遙かに隔たりて一日にても父上の御膝下に在りたしと思ひ昨夜も夢に父さまと申したりとて同宿の人々に笑われ候わゝ尤も敬愛する父上樣何卒此の君がダーリングチヤイルド(御愛子)のキッスを御

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

受納あそばされたく……
老紳士は彼の大眼鏡を外づし其濕ほひを拭ふたり。

○さすがに双紙　第七編（中）　美妙齋主人

砂糖を見れば甘さを思ひ、花を見れば花香を憶ふ心の關鏈は妙なもので、時子を見れば直に花房の一條を淸子はおもひおこします。　いくたびか舌ももぢ／＼しましたが、さすがに氣の毒と思はなくもありませんから、しばらくは寄手も差扣へても居ます。　時子もそれと同じことで是にはたゞ打出す勇氣が暫時後詰を待つて居るばかり、身躰がすこし横に爲つて、無心の目は無心の手が取上げた團扇に止まり、そして意味も無く指の腹は團扇の骨をみしみしと押して居ます。これがやゝしばらくの間でしたがその中に時子も思返しましたのでしやう、眼は團扇へ注いたまゝ聲はいつか唇から洩れ、
「兒玉さん、御兄ィさんは此地に居らッしやッて？こなひだ滊車の中で御目にかゝッたら函根へとか入らッしやるッて。」

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

「それが矢張り」、清子はすこし時を得て、「昨夕急に歸ッて來て」‥‥

このまゝしばらく休んで居て、思切ッたか、やがて下を向きながら遂に默しかねて言出します。

「そして、ねヱ、花房さんの事でねヱ」。

「花房」‥‥時子が語出さうといふ望の目的です。先を越されてはそれでも何處やら胸もどッきり。が、素よりしたしい間柄氣をしづめていよいよ團扇を手遊物にし、

「その事、じつは貴女だから御はなしするンですが、昨夜ねヱ、妾ンところへ花房さんが來て居たときよ、巡査が來て何も言はず拘引して行ッて仕舞ッて」‥‥

「花房さんが來て居たとき」‥‥實にこの花房といふ言語につながる動詞一ッでも時子の心は知れましやう。もはや自分の味方と思ッて花房といふ言語には尊稱の動詞「御出でなさッて居た」を用ゐません。

清子は不審の面色です。

「ぢやアまだ子細を知らないの？」、

「いゝえ、ちつとも」。

「實は、ね、堀さん」、清子は膝を進めます、「妾ヤ貴娘に對して御氣の毒で〳〵て本當にたまらないンだけれども、どうも公の事には私の口吻も挾まれず‥‥斯うやのよ、本當は妾の兄が、ね、花房さんを拘引させたの」。

まだ是だけでは時子も動じません。最初只一言「左樣？」と答へましたが、その「左樣」に力が入つて居ぬ塩梅、それが動じぬ證據です。

「そしてどういふ譯で？御存じ？」

「妾もまだたしかには聞きませんが、ね、大概斯うですと。栗殼とか言ふ人、ねヱ、その人の行方が無くなつちまつて、そして花房さんは駒ケ嶽へ其栗殼といふ人と一途に行つたといふたしかな證據が有るとかでどう〳〵花房さんに嫌疑がパワー、オヴアー（ふりかゝる）して」‥‥

あゝパワー、オヴアー？　煮切らぬ洋語の取りあはせは却つてカツレツの味を損じます。パワー、オヴアー孃は更に言葉を繼ぎ、

「兄も左樣言つて、堀さんにも御氣の毒だけれど、どうも困る、仕方が無い、職務上つて」‥‥

「そりやアもウ貴娘、左樣ですとも」、氣に止めぬ躰で輕く答へ、更に言葉に力を加へ、「そのたしかな證據とは？‥‥」

「百姓が見て居ましたと……駒ヶ嶽で花房さんとその栗殼と言人と組討をして居たのを山の這方でその百姓が見付け、やがてその傍へ行ッて見るともゥ花房さんばかりで他の人は居ず、そして花房さんの手が疵だらけで血も出て居て、あの着物も綻びて居たとかいふことで」……思當る箇條のみです。

あるひは其樣なことでゝもあッたらうと推察も爲ては居ましたが、その推察は言はゞ弱い推察で、さう思ひながら今迄は「多分まさか」の反駁が出沒してはその邪魔をして居たのですから、妙です、すでに左樣かと知ッて居て、それで時子も斯う言れてははじめてぎッくり胸に釘を打ちます。驚愕は却ッて平和の時によく來ます。

今は時子の心には淸子の兄が探出した手續をなほ委曲しく問正したい考が湧いて來ます。が、また思籠ッて尋ねると淸子に思ハれるのも殘念と、不思儀にも負惜みが瘦肱を張出しますので却ッてことさらに平氣な躰をよそほひ、一寸話を外へ移しますが、それは只氣を拔くための手段です。

「あなた、その御本何？」氣を更へて机の傍の書物の名を問ひます。

「これ？　なに、平家物語」。

「平家物語……何處？」

「あの貴娘の好な、そら横笛のところ」。

「あッ……横笛？　瀧口の入道の？」

酷く感じた躰です。今まで淸子に向いて居た目は急に重くなッて眉も低れ、思はず溜息が漏れて來ます。

「ねエ、兒玉さん、貴娘だう思召す、人は横笛が瀧口の入道と契りを結んだ件ばかりつかまへて誹りますが……あの妾は入道が道心を崩さなかッたのは全く横笛の決心の庇蔭だと思ひますわ」。

「あゝ左樣……「引とゝむべき心ならねば」の歌で心を述べて」……

無駄な挨拶時子もたしかには答へず、

「その時代の考で言へば横笛が如彼したのも無理じやないことよ。あの位な氣象は今の婦人も一躰持ちたいもンですよ」。

思付けば心はいつか重い方へ引かれます。

「妻が夫の究厄をたすけ、零落をはげましてこそ大閤も關白とまで爲れたンだわ。大廳が居なかッたなら事に因ると大閤だッて……ほゝゝ」。

淸子も興に入ッて來ます。

「だから貴娘も花房さんを」、にッこり笑ッて聲を下げ、……ほゝゝ、ねェ堀さん」。

「花房さんをどうするの？」察されたとは知りながら、そこが處女の可愛らしさ、わざとすねてやさしく睨み、「人……あなたは」。

「おらァ否よゥ……ぷゝぷッちやァ。本當に大廳はえらうムいますよ、ねェ、ほゝゝ」。

心痛の最中、なぶられては一躰嬉しくは無い譯ですが、この嬲方のみは些しも時子に憤恚を起させません。實に却つて變則の嬉しさを添へて居ます。なぜでしやう？

◆　◆　◆　◆

○小說神髓

蘇格氏著ケチルヲルス　（第二十九回）

レスター侯暫らくして其室より出で來り陛下の御前に罷り伺がふ、平生お談に巧みにて持成方に上達したるレスター侯も此日は何故やらん万事に重々しく沈鬱して甚はだ樂しからず其の申述ぶる言葉は恰かも人より敎へられて之を忘れ〳〵に言ふが如く殆んど席に得堪へぬやうに見へたり、近侍は侯が此の冷遇によりて陛下は定めし逆鱗ましますならんと恐る〳〵掛念したるところ陛下果して不滿に覺し召しけん侯に向ひて、アナタの待遇は實に行屆たれども今日よりも更らに好き容貌を見るとは適はざるにやと仰せあり、レスター侯恐れ入つて平伏し遂に謝して退り出づ。

バーチー傍はらに在りレスター侯を密かに召んで云ふやう御主人思ふようになりました典醫の診察によりていよ〳〵狂氣と定まり親戚へお預けとの事ゆへ私が勝手に取り扱ふとを得ますトレッセリアンが存ぜぬ間に今晩にも立退き而してトレッセリアンは明日押方附ませう。レスター云くいや〳〵トレッセリアンは余れ自ら復讐すべし、バーチー之を止め夫は良策に候うまじ私に御任せありたしと云にトレッセリアン大に激する如くにて答るやうは此大ひなる敵を只だ汝ち一人に托するとおたはず余れ自ら手を下して之を殺すか左なくば寧ろ陛下の御前に出て是迄の始終を白狀し同時に余に斯の恥辱と苦しみとを與たる彼の姦罪を訴へ余れ罪を受くると共に彼に亦大なる刑を蒙らしめん、バーチー熟つら主人の顏を見に眼こ血ばしり口に泡を吹き顏色土の如くにして狂人に似たり急にレスター侯の手を引て其の近くに備へ附たる大鏡の前に連

れ行き自身と其姿を見せしめて、君よう御覧あれ此の如き御様躰は此の危急なる場合に適當したる決心あるものゝ顔附なりと思し召す乎、レスター侯初めて氣附き然らば余れ何を爲すべき只だ汝ぢが奴と爲りて何事も汝が言ふまゝに隨ふべき乎、パーチー云ふ否な左樣には申さず人の制治を受けず御自身にて制治なされと申す迄でにて候今ま陛下の御前に出でゝ訴へん云々との事は抑も何等の考へより仰せありたるとか承知いたしがたし私は心氣高きレスター侯にこそ仕へ申すものなれ危急の場合に一々決心を變ゆるモミガラの如き人に仕うるとは致しませぬ格式こそ低けれ決心に於ては憚り乍ら御主人にまさるとこそ存じ候と力を凝め決斷を示して斷言したれば、サスガにもレスター侯は愧ぢて亂れたる心を取り反したり、パーチー更らに辭ばを盡し凡そ古來欺かれたる人少なからず君一人が欺きを受けたるにもあらねば速かに心苦を洗ひ去り玉へエメ殿は最早や姦淫によりて罪に相當するものゆへ殺すとも宜しからんと說得す、パーチーの冷淡なるに化せられてレスター侯は云へり成程自ら死を招きたるものゆへに殺すとも可ならん余すでに決斷したり然し今ま一滴の涙を落すとを許して呉れと云ふに、パーチー特更らに情なく否なな許し申すまじ君もしトレッセリアンの事を考へ玉はゞ涙も直ちに變じて恨みと成るべきにと云へば、レスター侯頓かに怒り左樣〳〵トレッセリアンを思へば最早容赦しがたし良しエメは汝ぢに托すべし彼奴は余れ自から成敗するに付き汝ぢ決して之を止む可らずとて印を着けたる黄金の指環を拔き取り當座の褒美としてパーチーに與へたり。

佳傳

○魯國の孝子、エリサベッス、ロプウロッフ孃(其二)

花山となんいへる市に着にし頃は數日以來大風吹續きければヴルガの河岸に無數の氷塊をぞ吹寄けるされば此の川渡はいと危くて對岸に渡らんには川の半を舟にて渡り又其殘りの半は氷塊より氷塊に飛越て行かねばならざるにより舟人等は渡を停て絕て舟出するものなかりきエリサベス孃はかくまで危き事とは露しらねばあわたゞしく渡船に乘り込み渡らんとを請求むれど舟人等は愚人よと思て荒々しく推出し口々に氷の全く融けざる内は渡船は出來ぬよし謂はれければ大に驚きて幾日程待たねばならんかと問ひけるに少なくも十五日と答られける然れども願ある身のエリサベス孃なれば是非とも直

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

に渡らんものをと思を定めいと憐れなる聲を出して舟人等に向ひドーヅ渡して下ださいドーヅ援けて渡して下ダサイ妾は柴伯亞の中部より參りました者で御ザイますが只今より都に上り冤罪にて罰せられました父の赦を願ふと存じます道程はまだ遠ふ御ザイますのに又此處に十五日も空しく待ちますは實にツロウ御ザイますからといひければ一人の舟人此言に感じけんエリサベス孃の手を執りてサー此方へお出でなさい私は兎も角も御案內申て見ましよう貴孃は神を御信仰なさいまして親を御愛敬なさるお方で御ザイますれは神もきつと御守なさるでしようから危い事も御ザイますまいと云ひながら共に舟に乘りて川の半ばを渡りたれども是より先は最早一歩も進み能はねば已むを得ず舟を捨て孃をば背負て櫂を杖き氷塊の上を躍り過ぎて辛くもボルガを渡りて前岸にぞ達しける。

エリサベス孃は未だモスコーに達せざる前早や既に貧苦の極に至り履は破れ衣服は裂け汚れ目も當てられぬ有様なるに折も折とて寒さは益々はげしくなり降り積る雪も早や三尺にも近くなりぬるに今は愈々かきくもりて紛々と飛廻る雪に前後も見分け兼たゝずむ隈もなかりける剰へ雪の吹舞しにて雨さへ降りけるに未だ地に墜ちざる前更に凍りて雪に和りければさながら氷の雨とぞ見へにける。

かく幾何となく堪へがたき困難に遭ひけるも猛け敷エリサベス孃なれば常に勇ましく又快活なりきされどこは全く神と父とをのみ思ひつめたるによりて大に其志を勵ましたるによりしとなん。

或路筋の村里にて圖らず尼寺に立寄りけるが其寺主いとゞ憐れに思ひて二書を認め孃に與へ其一封にてはモスコーの或貴女に紹介し他の一封にては聖ペトルスブールに住ふ或貴女に何くれと賴み入れたるものなりき扨暫くにしてモスコーに着けるに彼の貴女懇ろに孃をもてなし新しき靴と衣裳をも與へられければ此恩惠にはげまされ悅び勇みて尙も旅路に向ひ終にめざす聖ペトルスブールに着けるが實に孃が柴伯亞の鄕里を出でしより十八ケ月の後なりき。

寄書

左は花蹊女史漫遊詠草の一二として惠贈せられたるものなり

跡見花蹊

○歌九首

日光道中杉林を過て

行まゝに夏のよそなる心地せり緑すゞしき杉の下道

鳴虫山のほとりにて

山は笑み瀧の音さへをかしきを虫もあかしと鳴やしにけむ

あはれとてなく虫山の秋の頃月も流れに澄まさりけり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

二荒神社に詣て

來て見れは聞しに増るふたら山ふたつなきわか幸にぞ有ける

北白川宮御發見の初音の瀧を見て

かけ高き君にたくへとけふよりは世にあらハるゝこれの瀧つせ

霧降瀑を見て

秋冬のおもかげ見ねて雪とちり霰とはしる霧降のたき

幸の湖にて

さちのうみを鏡となしてとこしへに黑髮山はくしけつるらむ

赤城山しろね黑髮來て見ればおなし綠の夏木立かな

須賀川千鳥新田を過て

すかの根の長きすか川とめくれは水の音寒く千鳥鳴なり

○文苑

鈴木弘恭大人撰

日光山に詣てゝよめる　跡見千代瀧

かねてよりひと目と思ひしふたら山二度三度みれどあかれず

おなたをりに　跡見　桃子

ふたつなき二荒の山のやまの端にいまもかゞやく日の光り哉

日光山にて郭公を聞て　平尾　竹子

一聲を神にさゝげてふたらやまつぎてもなのるほとゝきす哉

日光山にて　田邊　朝子

ふじのねといづれおとらじ二荒のみ山も雲のうへに見ゆれば

同　丹羽　花子

神さびしふたあら山も秋されはもみぢのにしきうち重ねけり

同　朽木のぶ子

しるしらぬ二荒山につどひきて神のみまへにぬさたてまつる

同　三橋　久子

いかにしてうの名やよもみ聞ねけんしらぬ人なき二荒のやま

同　浦　早苗子

萬代の國のしづめとふたあらのみ山のかみはまもりますらん

新報

（此欄内自由に轉載を許す）

○長大息すべし

日報社内の知友某は去廿三日左の一報を吾人に寄せて女風の頽敗此に至て極まると慨されたり。其報の全文を寫せば、

府下の有名なる女學校（築地邊）の女生徒は他の學校生徒とも異なり學問も上進なし居る由なるが隨つてヘンナ意見を懷き何とぞして西洋人の外妾とならんと思へども別に頼むべき方なきより木挽町の或る商會の番頭某かりへ一人の生徒が郵便にて依頼し來りたるには某も其の淺墓なる心根にはあきれ居りしに既に三人迄依頼なし來りたる由女學雜誌の記者などが之を聞きし時は何如なる評を降さるゝやと或人は語れり。

何如にも驚ろくべき事なり、然れども其事の余まりに有るまじき者なるのみか、經歷する所ろを推すに少しく疑ふべき廉あり、故ろ只だ其誤まり傳へられんとを恐れて、確かに知られたる事實は之丈けなりとの趣を辨ず。若し夫れ眞とに如此きありとせば、吾人は更らに明記して嚴しく之を鞭誅せんとを期すと云ふ。

○マルワ號事件

磯田喜代松氏等は、左の書狀を差出したりと云へり、

一千八百八十八年七月二十六日彼阿會社滊船マルワ號神戸より横濱に出帆せんとするに當り磯田喜代松幷に其妻ヨシ之に乘込み居りしか出帆に臨み右ヨシなる者神戸に上陸し神戸警察署に到り貴殿ヨシに對し無禮の所行に及びたる旨を訴へ出でたるが爾後よくくヨシを取調べしに右ハ何かの間違にて前申す如き所行は之れ無き由ヨシ自から申し候に付右の訴訟ハ其後願ひ下げ候然るに此事諸新聞に出で貴殿に於て不埒の所行ありしやに記載し有りて之が爲に貴殿の名譽を毀損するやうに相成り候事我等深く氣の毒に存候右の次第なるを以て我等ハ茲に本書を以て右出訴の理由無根なることを證明し併せて向後此事件につき決して何等の苦狀も申さゞる可きことを約束致し候依て其の爲め證書一札如件

本人幷妻代理として

一千八百八十八年九月十八日

磯田喜代松（署名）

證人　磯田治平（署名）

證人　內山麗雪（署名）

彼阿會社滊船マルワ號……殿

吾人は最早や敢て辨ずるものに非ず。

○女の雜誌

いろくと澤山の割註ある女の雜誌、追々と世に出で來れり。新婦人第一號は二十五日發行の筈なれども吾人は未だ當二十五日に之を讀まず。文明の母と稱する女雜誌は來月十五日より鐵雞將軍の編輯にて出版せらるべし。金港堂の都の花は遂にもよう桜と爲り小說雜誌とか云へるに變じたるよし。尙ほ此外にもあるよし也。ヅンくとお出なさい吾人は熱心にエルカームを呈するもの也。

○萬國禁酒會　來る十一月豪州に於て開かるべき禁酒博覽會へ對し日本國內禁酒の景況を報告せんとて西京の反省會にて其材料を取調べらるゝ趣き東京婦人矯風會にも其旨を通じて質問せらるゝ所ありしと云へり。

○大隈伯爵夫人の面接日　大隈伯爵夫人は從來月曜日を以て霞ケ關なる官邸ゟ於て內外の賓客に接見せられしが暑中休暇中は廢止になり居たる處十月第一月曜日より從前の通り每月曜日を以て接見日と定められたり。

○大日本婦人教育會　去る十五日に一ツ橋外大學講義室にて開きたる大日本婦人

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

教育會四期總集會には加藤弘之末松謙澄兩氏の演說あり終て幹事小鹿島夫人より女子の衣服は洋服は衛生上短所あり日本服も甚だ不完全なれば本邦及び西洋共古代の服にて便利なるものを撰び長短相補へて實用し尙ほ不便なる所は經驗によりて漸次改良するとにしては如何其邊に心ある方は申合せ委員を撰びて調査せば或は好結果を得るともあらんかとの發議ありし由。

○保姆講習所　木寺安敦氏は此度芝公園地內共立幼稚園內を借用して私立幼稚園保姆講習所と云ふを設立し十八年以上四十年以下の婦女にして小兒開誘法、謡遊嬉及唱歌等を修めんとする者の爲めに專ら速成を主として之を敎授せんとの目的にて去る廿一日同氏より府廳へ出願せられたりと云ふ。

外報

（此欄內自由に轉載を許す）

○五十年間學校敎師　カザリン、デー、シムモンス孃は米國ボストン府に於て久しく學校敎師と爲り居られ當年にて即ち其五十年と相成たる由にて同孃が會長と爲らるゝフランクリン校會より金貨二百五十弗入つたる金嚢を贈りたりと云ふ。

○五十年間綿屋の女　又たサラー、ノルクロック孃と云へるは米國マッサチウセッツ州ロウエルの綿製造所に當年にて凡そ五十年間引つゞき勤めたるを祝し同所の會計及び支配人達より金一百弗を贈り尙ほ同所よりとして金時計及び金ぐさりを寄せたりと云ふ。

○女監吏、警察母　米國ニウヨーク府の女子矯業會にて向後製造所監察吏の半數は女子にせられたきよしを願ひ出し、又女子監獄會はニウヨーク州內の何處の府にも警察母を備へられたき由の議案を上院に出でしむるように盡力したり、右二つの願ひが實際の法律となれかしと其流の婦人は切りに願ひ居るよし也。

○婦人下宿　英國倫敦にて甞にメレー、フロールヂング夫人が婦女子にのみ下宿さする場所を造りたるに申込甚はだ多くして既に手狹となりしより今度更らに五萬磅即ち二十五萬圓程の資金にてベルグラビアに大なる下宿舍を設けんとの計畫のよし也彼地にて老年に至る迄でヒトリグラシをする婦人も少なからず又未亡人にして只獨り勞働するものあり色々の事情にて斯る下宿屋の便利莫大なれば扨ては斯く繁昌するをならんと思はる。

○清帝大婚吉日等の事　本月三日北京日報に據れば同日慈禧皇太后の懿旨を以て大婚、納釆、大徵の諸曲禮擧行の吉日を發布せられたり即ち本年十一月初二日に納釆禮同十二月初四日に大徵禮來年正月二十七日に大婚典禮の執行ある由なり。

○萬國衛生會議決　此頃ろ獨逸ビンナに開かれたる萬國衛生會議に於て女子が職工として働くの時間に制限を立つるの議決あり即はち時間を若干と限り夜工は全く禁じ晝頃一時間の休みを與へ其の歸宅して一家の爲に料理するの時間を供ふる等の箇條あり、スヰッツルランドにては直ちに之を採用しアウストリアにては將に採用せんとし他の諸國は尙ほ狐疑しつゝあると云ふ。

小供談

○言葉を愼しむ事

宮規子譯

或國の天子樣は或夜指の爪が悉皆拔け落ちた夢を御覽あり大層氣に懸け玉ひて翌朝早々有名なる占夢者を御召に相成昨夜の夢の吉凶を問はれました占夢者は畏まつて占考いたし申上ぐる樣此夢は吉夢にて陛下には御宗族御一同の御死なさるゝを見玉ふとの出來る吉兆にて候と言上しました。天子樣は之を聞し召され特の外逆鱗まし〱直ぐに占夢者を重き笞刑に處し玉ひたり因て早速亦他の有名なる占夢者を御召し遊ばされて問はれましたるに今度の占夢者も矢張り畏まつて占考いたし申上る樣是れは陛下が御宗族御一同の方々よりも御長命遊ばす吉兆にて實に吉夢に候と言上致しました天子樣は之を聞召され特の外喜び玉ひて占夢者に數千金を賜はりました。二人の占夢者の言ひましたとは同してありますが言葉の違つた許かりで先の占夢者は嚴罰を蒙り後の占夢者は褒美を戴きました夫れ故皆樣も先の占夢者の樣なとのないようにせなければなりません其れには言葉の遣ひ方に能く氣を付けてお話をなさらなければなりませぬ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

廣告

東京女子師範學校卒業生或は之と同等之學力を有する者二名横須賀軍港武官女子教育會女教師として月給十五圓以內にて雇入度に付望の者は申込むべし

但し師範學校卒業生に非ざる者は履歷書を添へらるべし

横須賀水交社支社

女子教育會事務所

●婦人教育雜誌 第五號 九月二十一日發兌 定價金五錢郵稅一錢

目次●社說 蠶業論を草して貴女に質す(承前)●論說 文明の婦座街頭に求むべからず(下河邊半五郎)○女服論 吉岡倉太郎●學 讀源氏物語の內乙女の卷講義(會員深井子)●保育 婦人のつとめ 松野久長)●叢話 陰德の心得 三宅雄二郎()人となる道 相馬居士()會員諸姉に望む(會員杉本まつ子)母親の心得(會員野崎いね子)●小說 三才女(吉岡倉六もの)●新報々告

發行所 群馬縣前橋市曲輪町九十二番地 上毛婦人教育會

●駒込幼稚園

幼兒ニ有ノ發達ニ注意シ懇切ニ保育ス就園ヲ望マル、モノハ每週月曜日ニ御申込ミ有ルベシ

本鄉森川町一番地 一百六十號

私立 駒込幼稚園

●音樂用罫紙大賣捌

壹枚金一錢宛 百枚以上割引

本鄉區本鄉三丁目十一番地小間物店

川越屋新兵衛

●婦人教會雜誌第八號 九月二十四日發行

目次●社說 虛禮を廢すべし(編者)○蝙蝠は自から招く(石村貞一)●法話 自進會に於て(島地默雷)●講話 婦人のつとめ 第四回(松野夫人)●唱歌○音樂學びかた(其二)(一四節)●雜錄 わしの在 第五回(東洋子)●月報○築地介女教會○女子文藝學舍○教賀婦人教會○德風振興○其他數件●本會記事○會員姓名●一冊價郵稅共四錢

發行所 東京日本橋區橋町壹丁目拾壹番地 婦人教會

每水曜日發行

基督教新聞

第百六十九號

●壹部二錢●二ヶ月郵稅共五十錢●半ヶ年同七九十八拾●總テ前金ヲ要ス

●實際不便ノ地ニ限リ一錢郵券一割增テ諾ス

明治廿一年九月十九日發行

目錄

●基督教新聞
社會問題第二 其の由來する所
「エバンゼリスト」の教會合併論今日の基督教は果して防御的なるか 湯本吉治
●教報
一致、組合、聖公會の諸教會及び彙報
●說教
信仰及其勝利(完) 小崎弘道
●雜錄
小說論
○寄書 彼得前後書註釋の批評に答ふ 海老名彈正
●寄書
●雜報及び廣告

東京
京橋區日吉町廿番地
警醒社

交詢案内

（催促する勿れ郵券十錢送れ委細に申來れ）

●雇ひたき方（甲）

十　教師　府下某女學校にて東京師範學校女子部卒業生を雇ひたき望あり授業時間三時間位にて校内に止宿しても宜ろしとのよし

十一　學婢　年齡十五六位のキリスト教信者にして薪水の業に從事し傍ら英學編物等の受業に志ありて給料に望なき者を雇度所あり

十二　下婢　年齡廿歲より五十歲迄の基督信者を雇入度者あり

●雇はれたき方（乙）

六　奉公　地方師範學校卒業生にて學費に困むに就ては可成西洋人宅にて兩人協力勉學旁雇はれたき二娘あり無給にて何地にてもよろし

七　裁縫　年齡廿二にして家内の手助けとならんが爲め内職に衣縫に雇はれ度き者あり華族様か町家ならば大家のかたき内にて築地邊ならば通いても宜しとのと其他ハンケチーフのふち縫の如きにても宜し

十二　教師　或師範學校にて普通學三年餘修業せしもの學校にて七八圓位にて通勤致したく又は他の御内にて人込み教授するならば六圓位にて雇はれたし可成は東京横濱の中を望む

十三　教師　栃木縣女子師範學校の卒業生にて何處かの學校或は他の御内にても教授に雇はれたきものあり可成くは麴町か駿河臺邊を望む

十四　洋行　身元慥なる十八歲位のものにて英漢學も可なり出來るものにて學問研究の爲め貴婦人の歸米に航せらるゝ御方の小間使ひになりて隨行を願ひたし

一九　召使　裁縫の教授を專にし其他女子學校等監督寄宿舍様の者に雇れたし

二〇　裁縫　年齡十四五才にて身分様か或官員方の御方之内に小間使に雇はれたし最も餘暇に裁縫稽古を授けくだされば給料は不申受

二三　教師　年齡二十七年東京府女子師範學校卒業生にして或る貴家令嬢の出教授を望む者あり

巖本善治編
女學叢書　**木村鐙子小傳**　定價十錢　郵税六錢

右は鐙子刀自の傳記にて姉妹方の必ず閲讀せらるべき價値あるものなり

東京々橋區日吉町八番地　**女學雜誌社**

發兌

九月。一日　八日　十五日　廿二日　廿九日
十月。六日　十三日　二十日　廿七日
十一月。三日　十日　十七日　廿四日
十二月。一日　八日　十五日　廿二日　廿九日

定價

一册。五錢　郵税。一錢（但府内無郵税）
十册。四十八錢　郵税。十錢（同前）
半年分　一圓十七錢　府外は　一圓四十三錢
一年分　二圓卅四錢　府外は　二圓八十六錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記録を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を掲する右雜誌十部の注文を要し以上半頁分毎に十部増の割合と定む

一行（廿七字詰）　一回　前金拾錢
同　三回以上　一割引
同　六回以上　二割引
十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道徳なる事物の廣告は謝絶す有益なる物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學に關係ある書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町[illegible]堂○同芝西久保櫻川町萬卷堂○同神田區雉子町團々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新葭町良明堂○同京橋區木挽町四丁目萬字堂○同本鄕區[illegible]○同日本橋區[illegible]○同本鄕區春木町[illegible]○同京橋區木挽町四丁目交[illegible]○同本町六丁目[illegible]○同[illegible]クリスチアンボ[illegible]○[illegible]仙臺國分町[illegible]○伊勢安進堂[illegible]○[illegible]縣大[illegible]○相州小田原[illegible]○土佐國高知本町二丁目[illegible]○熊本文明堂

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 5 *sen*. By post *yen* 1,43 six months, *yen* 2.86 per annum, in advance.
Edited and Published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHŌ, SHINBASHI, Tōkyō, Japan.

明治二十一年九月廿七日印刷
明治二十一年九月廿九日出版

發行所　東京京橋區日吉町八番地　女學雜誌社

編輯兼發行者　東京京橋區日吉町八番地寄留　巖本善治

印刷者　東京芝區源助町十一番地寄留　森田豐

遞信省認可